プラジュニャーカラグプタ（PVBh）における有形相知識論の一側面

岩田　孝（著）　藤本庸裕（訳）

I　法称（Dharmakīrti）の注釈者達の認識論的な立場は種々あるが、その中にあって、プラジュニャーカラグプタ（Prajñākaragupta）の立ち位置はかなりはっきりとしている。何故なら、プラジュニャーカラグプタの citrādvaita 説に関する言説を、ジュニャーナシュリーミトラ（Jñānaśrīmitra）が自身の立場（Sākāravijñānavāda, 以下、有形相知識論）の論拠として引用しているからである[1]。本稿の目的は、知識の二形相性を証明する論証のうちの一つ――即ち、「青とその知識とは必ず共に知覚される（sahopalambhaniyama）故に、別なものではないという論証」（＝ sahopalambhaniyama 論証）[2]**【1】**――に関して、プラジュニャーカラグプタが提示する[3]解釈もまた有形相知識論となっていることを示す点にある。

II　sahopalambhaniyama 論証（cp. PV III 388–391c）について、プラジュ

---

[1] See JN p. 461, 15ff.; 沖［1975: 86–84］.

[2] sahopalambhaniyama 論証の概要については、Iwata［1981b］を参照①。

[3] 本稿では PVBh のみを考慮に入れる。チベット語訳でのみ現存し、プラジュニャーカラグプタの作とされる Sahopalambhaniyamasiddhi については、別の機会に論じる予定である②。

ニャーカラグプタは次のように解釈する。

> 青と［その］認識とは実際には同一である。何故なら、それらは互いに別々には把持されない故に、［一方が］存在し（anvaya）[4]［ていながら、同じ時に他方が存在し］ない（vyatireka）[4]［という］ことは［あり得］ないからである（PVBh p. 410, 22）③**【2】**；対象が［その］知識と同一であることは否定できない。それらは安危存亡を同じくする（abhinnayogakṣematva）からである。‥‥‥それ故に、知識は形相を有する（sākāraṃ vijñānam）ということが成立する（PVBh pp. 410, 32–411, 1）④[5]**【3】**。

【2】と**【3】**では、一方が他方と区別されないことを理由に「sahopalambhaniyama」が説明される。この考え方は、プラジュニャーカラグプタの citrādvaita 説において多様な形相の単一性を証明する為の本質的な論拠となっている弁別不可能性（aśakyavivecanatva）に他ならない[6]。事実、プラジュニャーカラグプタ自身は他の箇所で sahopalambhaniyama を解釈する際に弁別不可能性を用いている[7]。

---

[4] この解釈は通常の論理学的術語（→包摂関係）と異なっているが、これはヤマーリ（Yamāri）の注釈に従ったものである。See PVBhṬ(Ya) Me 402a5–6 (PVBh p. 410, 5); ibid. 277a3–4, 277a5–7 (PVBh p. 295, 13; 15); ibid. 428a7 (PVBh p. 448, 13).

[5] See also PVṬ(R) (PV III に対するラヴィグプタ（Ravigupta）の注釈) Phe 167a5–6; PVBh p. 410, 11–12.

[6] See PVBh p. 289, 26–27.

[7] See PVBh p. 409, 27–28; 岩田［1982: III.B.1］.

citrādvaita 説の文脈では、形相の弁別不可能性が（単一の）知識における形相の存在[8]に依拠している（→自己認識）[9]点が一層明瞭となる。この思考は sahopalambhaniyama 論証における次の言説に近似していよう。

> 二月として［誤って］構想されたものは、不二である（advaya）（→同一）。何故なら、それは単一の知識（→自己認識）[10]のうちに含まれているからである（ekavijñānāntargata-tva）（PVBh p. 410, 6–7）⑤**【4】**。

以上のことから、プラジュニャーカラグプタの場合、「citra」という概念もまた grāhya と grāhaka との組み合わせを含んでいる以上[11]、「青（nīla）と［その］認識（saṃvedana）→ sahopalambhaniyama → eka」という論法（**【2】**、**【3】**、**【4】**を見よ）が、citrādvaita の論法（citrākā-ra → aśakyavivecana → eka）と類似していることは明らかである。

III　客観的契機と主観的契機の二つが同一であることについての具体的な説明は、sahopalambhaniyama 論証に対する注解ではなく、他の箇所に見られる。

1. プラジュニャーカラグプタは客観的契機の自己認識を次のような指摘を以て論証する。即ち、或るもの（A）の認識は、それが青の認識で

---

[8] See PVBh p. 290, 12–13 (Tib.(Te 331b3)によれば、<a>vivecanam か).

[9] See PVBh p. 288, 3–4; 沖［1975: 87］.

[10] See PVBh p. 410, 2–3: svasaṃvedane(1) sati na bhedaḥ pratyetuṃ śakyaḥ svarūpasya.

(1) Tib. The 88a2: *shes pa* rang rig yin na.

[11] See PVBh p. 290, 12–13.

あれ、楽（→心的要素）の認識であれ、常に A の形相を有し、その固有の本性によって自らを直接認識するのである、と[12]。A の側から見ると、

> それら青等もまた、直接知覚されることを本性とする（aparokṣarūpatva）故に、感受そのものである（anubhavātmaka）。従って、楽等のように自己認識に適合する（PVBh p. 402, 1）⑥。

上述の主張は、認識を成立させる四つの要素（pramātṛ, prameya, pramāṇa, pramiti）を区別する考え方（→ニヤーヤ学派の見解）[13]への論駁となっている。プラジュニャーカラグプタの見解によると、これら四つの要素は全て一つに統合される[14]。ここでは、「直接知覚されること」（aparokṣatva）が客観的契機を主観的契機に還元する上で重要な役割を果たしている。

2. ［認識内部における］顕現（pratibhāsa）ないし顕照（prakāśa）の場合にも同様のことが帰結する。即ち、青の知識が成立するのは、青が単独で知識（→顕現）とは別に存在しているからではなく、直接知覚されることによって青が顕現に含まれることによるのである[15]。これと同じことが顕照の場合にも当てはまる。

---

[12] See PVBh p. 401, 23–25. Tib. (The 78b8, 79a1) によれば、[arth]<sukh>ādisaṃvedane; [arth]<sukh>ākāram.

[13] See PVBh p. 401, 19–20; Nyāyabhāṣya (Nyāyasūtra I.1.1 に対する注釈).

[14] See PVBh p. 401, 21: ekatraiva sarvaparisamāpteḥ.

[15] See PVBh p. 389, 1[(1)]; 3–4.

(1) Tib. (The 65a5)によれば、pratibhāsā<ntar>[ttad]gatam.

> 勝義［の立場］から［見れば］、［それ自体］光（／顕照）でないものが顕照することはない。‥‥‥対象［もまた］その本性により、［即ち］顕照という本性により（prakāśa[ka]-rūpeṇa）顕照するのであって、決して他のものによって顕照されるのではない（PVBh p. 448, 6–8）⑦。

しかし、自ら顕照すること（svaprakāśa）[16]は知識の本性である[17]。故に、客観的契機は顕照を本性とする限り、知識に還元されることになる[18]。

IV　citrādvaita 説は、知識は対象の形相を有しているという教説（→有形相論）に基づいていることから、citrādvaita 説と類似する sahopalambhaniyama 論証もまた知識の有形相性（sākāratva）と結び付いている。注目に値するのは、sahopalambhaniyama 論証では二つの契機の完全な同一性が強調されているにも拘らず、こうした有形相性が消失していないという点である（**【3】**を見よ）[19]。その為、次のような形の有形相論が認められる可能性があろう。即ち、本性上真実である知識と同一である故に、形相（→客観的契機）もまた真実なるものと見なされるという有形相論である。もしこのような見解が外的対象を前提とすることなく成立するならば、それは有形相知識論の一つとなる[20]。確かに

---

[16] See PVBh p. 448, 12–13 (prakāś[y]ate か).
[17] See PV III 327; 329.
[18] この議論については、例えば PVBh p. 349, 1–4 (Tib. (The 22b4): [phal]<sakal>ādhigati-; PVṬ(R) Phe 145a2–3; PVBh p. 354, 8–10; PVṬ(R) Phe 149a6–7 を参照。
[19] See also PVBh p. 416, 33ff.
[20] 例えばシャーキャマティ（Śākyamati）はこの意味で sahopalambha-

プラジュニャーカラグプタ（／法称）の言うように、外境論者（Bāhyārthavādin）に対して sahopalambhaniyama 論証を論式化するならば、差し当たっては外的対象という前提（→経量部、Sautrāntika）を出発点としなければならない[21]。しかしながら、外的対象は本来推論によってのみ想定される[22]（→直接知覚されない）から、それは勝義としては成立しない。智慧ある者達にとっては唯識説のみが受け入れられる[23]。そして、あらゆる規則的な事象（因果関係や推論等）は外的対象がなくとも専ら知識内部において説明が付くので[24]、もし客観的契機が識の相続（santāna）の一要素として解されるならば、sahopalambhaniyama 論証もまた唯識説の枠組みの中で構成される。次の言説はこの点を示唆している。

> 従って（→何故なら、主観的契機と客観的契機の区別は次のような仕方でのみ構想されるので、つまり、［個々の刹那においてではなく、同様の］相続［を形成する多刹那］の［虚構なる］同一性を前提とする限り、二つの契機は互いに区別されるから）、実際には（両者の）区別はなく、ただ、［構想された］共通性に基づいて名称として存在している相続に

---

niyama 論証を用い、有形相知識論を支持している。岩田［1981a: III］を参照。

[21] See PV III 398b–d: bāhyaṃ tv āśritya varṇyate / dvairūpyaṃ sahasaṃvittiniyamāt tac (= dvairūpyam) ca sidhyati //; PVV p. 217, 12ff.; 戸崎［1979: 109］.

[22] See PV III 391d–392; 戸崎［1979: 104］; PVin I 59d.

[23] See PVBh p. 416, 21.

[24] See PV III 391d–397; 戸崎［1979: 104ff.］.

おいて［区別があるに過ぎないの］である。しかし、勝義として存在する[25]独自性に基づくならば、必ず共に知覚されることのみがある。それ故に、区別されないこと（→同一性）こそが勝義なのである（PVBh p. 416, 31–33）⑧。

従って、プラジュニャーカラグプタにとっても、sahopalambhaniyama 論証は有形相知識論の基盤となっているということが理解できる。ただしこの場合には、勝義の立場から見て、知識は外的対象が存在しなくとも任意の形相を有しているということではなく、知識と完全に同一であり、従って知識それ自体と同じく真実なるものとして見なされる形相を備えているということが、プラジュニャーカラグプタにおける sahopalambhaniyama 論証の意味するところとなる[26]。

〈略号〉

Iwata,Takashi（岩田孝）

［1981a］　「Śākyamati の知識論」『フィロソフィア』69: 143–164.

［1981b］　“Bemerkung zur sahopalambhaniyama-Schlußfolgerung

[25] pramārthasat<yan>[van] (?).

[26] この見解は明らかにダルモーッタラ（Dharmottara）の見解と対立している。ダルモーッタラは客観的契機が真ではないという前提の下、二つの契機の別異性を単に否定しているだけで、両者の同一性は否定している（see Iwata［1981b: II.b］）。プラジュニャーカラグプタの場合、（PVBh では）同一性の解釈のみが前面に出ており、他の解釈は現れない。だが、プラジュニャーカラグプタがダルモーッタラの見解を知っていたのか、あるいは意図的に言及しなかったのかは明確には確定できない。

Dharmakīrtis und seiner Kommentatoren," *Journal of Indian and Buddhist Studies* 30(1): 493–486.

［1982］　「Devendrabuddhi の知識論」『仏教学』13: 1–36.

Oki, Kazufumi（沖和史）

［1975］　「citrādvaita 理論の展開——Prajñākaragupta の論述——」『東海仏教』20: 81–94.

Tosaki, Hiromasa（戸崎宏正）

［1979］　「「プラマーナ・ヴァールティカ」現量章の和訳研究（18）」『哲学年報』40: 83–109.

その他の略号は、Iwata［1981b］、岩田［1982］に従う。

〈訳者注〉

① 脚注 2 は原著の注 3 に相当する。

② 脚注 3 は原著の注 2 に相当する。

③ PVBh p. 410, 22: ananvayavyatirekitvād ekam eva nīlasaṃvedanam anyonyavyatirekeṇādarṣanāt.

④ PVBh pp. 410, 32–411, 1: abhinnayogakṣematvād ekatvam arthasya jñānena durvvāraṃ na hi vārayituṃ śakyam iti sākāraṃ vijñānaṃ siddham.

⑤ PVBh p. 410, 6–7: indudvayābhimatam evādvayam ekavijñānāntar-gatatvāt.

⑥ PVBh p. 402, 1: te 'pi nīlādayo 'parokṣarūpatvād anubhvātmakaḥ. tataḥ sukhādivad eva svasamvidi yogyāḥ.

⑦ PVBh p. 448, 6–8: aprakāśasyāpi na pramārthataḥ prakāśaḥ. …

arthas tadrūpeṇa prakāśa[ka]rūpeṇa prakāśate na tv anyena prakāśyate.

⑧ PVBh p. 416, 31–33: tato vastuni na bhedo 'pi tu prajñaptisati sāmānyena santāne. pramārthasatvan tu svalakṣaṇam apekṣya sahopalambhaniyamam eva. tato 'bheda eva paramārthaḥ.

＊訳者付記

本稿は Takashi Iwata, “Ein Aspekt des Sākāravijñānavāda bei Prajñākaragupta (PVBh),” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 31(1), 1982, pp. 469–466 の和訳である。本和訳作成に際して三代舞氏（早稲田大学非常勤講師）から多大な助言を頂いたことをここに感謝申し上げる。

なお、同論文の内容を補完・拡充したものに、岩田孝「Prajñākaragupta （PVBh）に於ける有形相知識説に関する一考察」『Saṃbhāṣā』 5, 1983, pp. 39–67 があるので、詳しくはそれを参照されたい。

最後に、原著の翻訳を快諾して下さった岩田孝先生に心よりお礼申し上げる。

（本稿は科学研究費補助金（課題番号 16H01901）に基づく研究成果の一部である。）